

市民タイムス



昭和42年の西穂落雷事故

北アルプスの西穂高岳独標(どひびょう)で昭和42年、集団登山中の松本深志高校の2年生が落雷を受けて11人が死亡した事故で、卒業40年を迎えた当時の同期生たちが一日、現地で追悼登山を行った。事故で重軽傷を負った7人など同期生34人と、現役の山岳部生徒ら計54人が参加して、犠牲者を追悼した。

(小岩井貴之)

深志同期生追悼で登山

独標を仰ぎ見る尾根で黙とうする同期生ら(1日午前11時50分ころ)

△西穂高岳独標落雷事故 昭和42年8月1日、集団登山の松本深志高校2年生46人(うち教師5人)が、北アルプス西穂高岳(2,909m)を登頂。下山途中の午後1時40分ころ、岩稜(いのりや)の独標(2,701m)で被雷し、生徒11人が死亡、生徒と引率教諭ら13人が重軽傷を負った。学校登山の歴史に残る大惨事となった。

どうのように、前日に上高地から入山した人と、当日に岐阜県側からロープウェーを利用して登つた人が、それぞれ独標を縁香や花を手向けて了。独標を仰ぐ尾根に下りて一緒に追悼式をした。

式の始まった午前11時45分ころに雨が降つたが、朝からの霧は晴れ、周辺の峰々がくっきりと見え

た。参加者は全員で黙とうをきさせた後、深志高

校内慰靈碑前で約100人が冥福祈る

約100人が転落した上高

校内慰靈碑前で約100人が冥福祈る

う。「一つれひを爰とわ

かづべく、命の歌を歌は

典を行う。代表幹事の上

条誠一さん(58)は「松本

市中央公民館は「同期生の

中でようやく一つの区切

りをつけることができ

た」と感概深げに話した。

落雷事故で岐阜県側に

お詫びの言葉を述べた。

正さん(59)は「諏訪郡富士見町」は10年ぶりの追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

さないと言った。

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

市長に代わって追悼の

言葉を述べ、遺族会会長

の太久保文弘さん(61)

が参列への礼を述べた。

事故当時の様子を思い起

こさせようとしているか

のよう、雷鳴がどう

なるかなど、

みすず野

校長の藤本光世さんは、長野市篠ノ井にある曹洞宗の寺院「龍眼山円福寺」の住職でもある。この夏、三十六年前に行われた学校登山の道をたどった▼上高地から四時間余をかけて西穂山荘に着いた。翌八月一日の早朝、同山荘を出発、独標を経て、西穂高岳までは三時間の行程だった。頂上には三千分ほどいた。帰りは休憩を挟み、独標には午前十時二十五分に戻った▼OBの小林俊樹さん、独標北斜面で被雷負傷した鈴岡潤一さんたち四人が一緒に歩いた。さくらん祭壇を作り、白百合を手向け、酒をそそいだ。独標では関係者の別ペーパーと合流した。小林さんの司会で黙とうをききげた▼お盆が過ぎ

てから、藤本さんは遺族宅を訪ね、登山の報告をした。クリスチヤンである遺族の一人から「神は耐えられないような試練を与えない」と聞いた言葉を、二学期の始業式で在校生に伝えた。遺族の心と姿だった▼「西穂落雷事故を胸に刻み、祈り続け、学び取ることが努め」と藤本さん。学校年間行事表の八月一日欄には、昨年から「西穂遭難追悼行事」が書き加えられた。深志は忘れない。

みすず野

三十八年前に高校の教頭だった清水和彦さんは、校長室にいた。時の校長とともに、米国から帰国した生徒を囲んで懇談していた。午後三時ころだった▼農科警察署から連絡が入った。「本日午後、穂高独標付近で落雷のために五名が死亡した、いや、後からの報告だと十名が負傷したとの報があったが、本日の生徒が独標に登ったかどうか」との質問であった▼清水さんはメモで二年生の登山があったことを知り、警察にその旨を伝えた。校長は非常招集をかけた。波乱の教育人生を振り返り、さきに刊行した自叙伝『学びの旅教えの道—戦前・戦中・戦後を生きて』に詳しく記した▼「一切の責

任は私にある。私が命じて行ってもらったのである。先生方はほど苦労さまと申し上げることはない」。教職員にそういって学校を去った校長の言葉である▼西穂高岳独標で、集団登山中の一行が落雷に遭い、生徒一人が亡くなった。母校での慰靈行事や、追悼の登山が行われている。巡る八月一日の記憶として深く刻まれる深志落雷忌。

松本深志高校の一年生九人が職場見学に訪れた。働くことの意味を考え、進路決定や大学選択の参考にする学習活動だ。最新鋭の新闘製作システムに驚いた様子だった▼情報はどう入手するか、にも強い関心があつたらしい。事件の多くは、関係機関の発表や読者からの情報提供による。西穂独標落雷の悲劇は、警察から報道各社に第一報がもたらされた。三十九年前の八月一日だった▼学校は豊近で落雷のため五人が死亡した、いや後からの報告だと十人が負傷したとの報があつたが、生徒が登つたかどうか」。新聞社は現地に大勢の記者を送り込んだ▼集団登山中の二年生十一人が亡く

みすず野

なった。母校にある慰靈モニュメントの前で追悼式が行われた。坂巻道弘校長は一人ひとりの名前を読み上げ、「現任校長としておわびする。明るく安全な学校づくりを誓う」と述べた▼練習中の運動部員たちが花を手向け、補習中の在校生は授業を中断して黙とうをさげた。追悼登山も続いている。校史百三十年に刻まれた悲しみと祈りはこうして受け継がれる。

松本市の自営業内川清志さんは五十六歳になる。北アルプス西穂高岳の独標を思つ。遠い過去の出来事なのに、五感に擦り込まれた体験と記憶は鮮明によみがえる▼山頂で弁当を広げると、いきなり雨が降りだした。西穂山荘に避難しようと下山を開始した。遠くで雷鳴が聞こえた。遠くで雷鳴が聞こえた。独標の急斜面にかかり、四つんばいで登つて倒れていた。背中越しに名前を呼んだが返事はない。「丈夫か」。叫び声が聞こえた。見上げる

みすず野

た電撃は、右肩と右足に抜けていた。用を足して遅れ、内川さんを追い抜いて独標の上りを急いだ人が、雷に打たれて亡くなつた。生死と人生を分けたあの日。「運があったのかな」と思えるようになつた▼一九六七年(昭和四十二)年八月一日だった。集団登山中の松本深志高校の二年生と教諭が独標で被雷し、生徒十人が死亡した。山岳遭難史に残る落雷事故からちよつと四十年になる。

みすず野

四十一年前の音風景は「葬送行進曲」で始まつた。西穂落雷高校の学校葬である。実は録音テープが残されていた。夏の記憶がよみがえる▼「心むなしの果て、悲しみの極みに耐えて」。式辞に立った当時の赤羽誠校長はこう切りだした。亡くなつた教え子一人ひとりの名前を呼んだ。合唱「穂高に逝きし若き御靈に捧ぐ」を挙み、生徒の弔辞へと移る▼親しみを込めた呼び捨てで遺影に向かつた友がいた。遠足の思い出をすり泣きながら語る仲間もいた。夢や学術の理想を語り明かした夜があった。「遠い世界に行つても心の中に生き続ける」。時空を経ても変わらない▼「おまえ

の分まで立派な花を咲かせてみせる」「悲しみを無駄にしない。君の分まで頑張る。僕たちはきっとやる」「おまえが果たせなかつた夢をおれが果たす」。涙の誓いは、力ミナリ学年が抱く共通の思いである▼昭和四十二年八月一日だった。集団登山中の深志高二年生と教諭が西穂・独標で被雷し、生徒一人が死亡した。山岳遭難史に刻まれた。命日の祈りと追悼登山が引き継がれている。

みすず野

鈴岡潤一さんは、母校の松本深志高で世界史を教える。あの夏の日、背中のほぼ真ん中に雷撃を受けた。右足の親指のつめが変形している。雷が抜けていつたあとである▼北ア・西穂山荘への下山途中、独標の上りにさしかかったところで氣を失う。背中に入った雨の冷たさで意識が戻つた。右耳がちぎれそうになつていて。後ろ向きに倒れた際、岩の迷路の先にあつた急斜面で、運命が分かれた。岡さんは助かり、すぐ後ろを歩いていた親友は亡くなつた。「人生を拾つた」「生かしてもらつている」。当事者である事実を語り始めた時間であった▼山岳部の

顧問を務める。在校生たちを引率して今年も向かう追悼登山に、大学2年生になった次男が同行する。長男も父親と同じ高2になつた年に登つていふ。子どもたちに、寡黙な男親の背中はどう映つていただろう▼昭和42年8月1日だった。集団登山中の深志高2年生と教諭が独標で被雷し、生徒11人が死亡した。わが国山岳遭難史に悲しく刻印された「カミナリ学年」の卒業から40年になる。

北アルプス幻想行

西穂高岳独標^{どっぴょう}。この悲しい響きを持つ岩峰に立ちたい。

立つてどうなるものでもないが、立つことによって何か体感でき、当事者や関係者の消えることのない深い悲しみの淵に、わずかでも寄り添え、山というものの、人生というものを見る契機になればいい。そんな想念といふか、強い内的衝動に突き動かされていた。

三十五年前になる。昭和四十二(一九六七)年八月一日午後一時四十分ころ、松本深志高校二年生の集団登山の一一行四十六人(うち教師五人)が、北アルプス西穂高岳(二、九〇九メートル)登頂の帰り、独標と呼ばれる岩稜を登攀中、落雷に遭い、十一人の生徒が死亡、十三人が重軽傷を負った。

これより半世紀以上前の大正二(一九一三)年八月二十六日、中央アルプス駒ヶ岳で中箕輪尋常小学校(現・箕輪中学校)の生徒ら三十七人が台風に遭遇し、生徒十人と赤羽校長の合わせて十一人が死亡しているが、奇しくも「死者十一」という数字が一致する。

大惨事に遭った松本深志高校生たちはいま、五十二歳。社会の中堅を担い、人生花盛りの時節を迎えていて不思議はない。生還した彼、彼女らはどんな人生を歩んでいるのだろう、また引率した教師たちは、遺族は…。遭難から一年、同校が発行した分厚い追悼文集『独標に祈る』をリュックにしのばせ、上高地から一行が登ったと天体同じ登山道をたどった。



3代目・村上文俊さんが登山客と応対する

針葉樹林帯の急登が続き、苦しかった。休む度に冷える体にまた汗がどっと噴き出してきた。西穂山荘前の斜面にお花畠があり、ハクサンフウロの美しい花に疲れを癒された。西穂山荘は平成二年秋、火災で全焼してしまい、四年に完成したログハウス風の山荘。専務の村上文俊さん(三回)がやさしい笑顔で迎えてくれた。

ロビーの頭上に、在りし日の村上守さん(初代)が愛犬とともに写る大きなパネルが掲げられてあった。少年時代、上条嘉蔵次に連れられて初めて上高地に入り、やがて山小屋建設の夢を抱き、労苦の末に実現、名ガイドと称された「西穂のおやじさん」だ。

松本深志高校の事故発生の際も、従業員を現場に急行させ、登山者に協力を請い、自らも背負子を背に独標に駆けつけた。遺体の収容やけが人の救出にリーダーシップを發揮、おつかねする生徒らを励まし続けた。

文・赤羽康男／写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)

文俊さんが生まれる一ヶ月前の出来事。「山は人の心を変える力あり」が口癖だった守さんの精神は、「二代目・健一さん(三)、孫の文俊さんに受け継がれている。

岐阜県側に新穂高ロープウェイ

が開設されて以来、登山者のほかに小さな子供連れや年配者が増えた。「安全が何よりです」と語る文俊さん。泊った日の夕、けが人も背負子を背に独標に駆けつけた。遺体の収容やけが人の救出にリーダーシップを發揮、暮れる危険な状況下での的確な判断をする姿に、守さんの「幻影」を見た。

現場に駆けつけた「おやじさん」

朝日に染まる峰 険しく美しく

山の朝は早い。

西穂山荘で用意してもらった朝食のおにぎりをリュックに詰め、日の出前の薄暗い登山道を登る。尾根道に出で、高度を稼ぐ。鳥が切れる。背後の焼岳の山頂が朝焼けに輝き出した。

「独標だ、独標に登るんだ」頭の中を「独標だ、独標に登るんだ」頭の中を

若い単独行の女性が、気ばかりせいて足が空回りするこの不格好な中年男を追いかけて行く。同僚のカスマラマンが重い機材を背負つてあえぎあえぎ登って来る。

独標が近づいた。岩峰というより、四角い大きな岩の塊だ。

直下の鞍部で一息入れ、氣を引き締めて岩場に取り付いた。途中で足元の視線を横に移すと、ルート右わきに小さな「慰靈の碑」が立っていた。下山後、遺族を訪ね歩いて知ったのだが、この慰靈碑は松本深志高校や遺族会が建立したのではなく、命を落した十人の中の一人、嶋田利夫君の穗高中時代の同級生たちが、重い石を担ぎ上げ、据えたものであつた。碑前に跪き、手を合わせ、写真に収めた。

午前五時三十五分、独標の頂(二、七〇)一
がに立つた。

そこは思ったより狭く、中高年のツアーデ
すでに満杯状態だった。ちょうど朝日が前穂
高岳の峻厳な峰々から昇って、岩塊を神々しいまでに染め上げた。

見事というほかない眺めだった。北は西

穂、ジャンダルム、奥穂に続く険しい岩稜、西は美しい姿の笠ヶ岳、遠く白山、南は焼岳、乗鞍、東は遥か富士山と甲斐駒ヶ岳、北岳、仙丈、塙観、赤石、聖岳といった三〇〇以北の南アルプス連山、手前に中央アル

バス、左手に八ヶ岳…。

三十五年前、松本深志高校二年生の一一行四十六人(うち教師五人)は午前十時四十五分にここに着き、早めの昼食を取っている。このとき、西穂頂上までははつきり見え、天候急変の兆は感じられなかった。

ただ、西穂山荘主の村上守さん(故人)は、早朝起床して笠ヶ岳方向を眺めたとき、「赤いキレギリになつた雲を見て『今日は危ないぞ』と思った」という。この雲が出ると

必ず雷雨になるわけではないが、従業員に注意を促している。

独標から西穂高岳山頂までは人のすれ違いにも神経を使つゝせ尾根が続く。しかも大小の鋭い岩稜が連なり、両手両足でバランスを取つてよじり、足場を探して這いつづくよう

たた、深志高校の生徒たちは上高地から一気に山頂まで登り、上高地に下山する計画だつた。身軽な二、三人のパーティーではない学校集団登山だ。「独標越えの選定と一日の行程に無理があつたな」。登りながらの率直な実感だった。

文・赤羽康男／写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)

一步間違えば谷底に墜つ逆さま。緊張の連続だが、これぞ登山の醍醐味と言えば、そうである。



登山者でにぎわう西穂独標

一瞬の雷光 11人の若い命散る

三十五年前の八月一日、松本深志高校二年生の一一行四十六人(うち教師五人)は、西穂高岳(二、九〇九m)に登頂した。しかし、山頂はガスに覆われて全く眺望が利かず、午後四十分ころ、鈴木重春教諭(リーダー)を先頭に下山を始める。

下山と言つても一気に下れる山ではない。

やせ尾根が続き、足場を確保しながらはいざる岩壁もあって、相当な緊張を強いられる。

一行が下山開始するころ雨が降り出し、岩は濡れて一層の注意が必要だった。大きなピクを下り切ったところ、豪雨がやって来た。大きな雹が交じり、みるみるうちに足元の岩のくぼみにたまつた。

「私は本当に『しまったな』という思いに胸を衝かれていた。この天候はまさしく雷雨である。私は『どうしようか』と慌しく思ひめぐらした。雹混じの雨は烈しく、飛騨側から吹き上げる風は冷く強い」(西穂遭難追悼文集『独標に祈る』より)。

「私」とほ錦木教諭である。この稜線上で待避か、稜線を避けて急斜面で待避か、独標を越えてハイマツ地帯に逃げ込むか、三つに一つ。だがどれも危険を伴う。

「独標を越える以外ない」

錦木教諭は腹を決め、すぐ後ろに続く書始めた女生徒を励ましつつ、先を急いだ。稻妻と雷鳴が迫ってきた。そして一行が独標越えしているまさにそのとき(午後一時四十分ころ)音もなく火が吹いて、雷が落ちる。

鈴木教諭はすでに独標を越え、九人の生徒とともに南側斜面にいた。その瞬間、頂上すぐ上に光を見、鼻に強烈な衝撃を受けて体が宙に浮かび、仰向けに沈んでいく。「ああやつぱり」の思いと、「終わったな」という思

いが交錯した。

落雷の瞬間、独標頂上に八人、頂上を目指す北側斜面に二十三人、鞍部から後ろにはさらに五人がいたのだが、死者、重軽傷者は鈴木教諭以外、すべて北側斜面(長さ二六・六m)に足を掛けた二十三人だった。

頂上に立っていた者が被害に遭わらず、斜面を登っていた者に被害が集中した。不思議なことだ。これは落雷放電が雨を媒介にして、抵抗の少ない岩の間に伝わったとの説がある。(『西穂高岳落雷遭難事故調査報告書』より)

懸命に目を瞑らしもの、三十五年前の痕跡がありようはずもなく、岩間に咲く清楚なイワツメグサが風にかすかに揺れていた。

文・赤羽康男/写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)

西穂独標の落雷遭難 昭和四十二(一九六七)年八月一日午後一時四十分ころ、松本深志高校二年生の一一行四十六人が西穂高岳からの下山途中、独標で被雷し、男学生十人が電撃死もしくは電撃ショックによる転落死した。重軽傷者も十三人を数え、落雷遭難史上、空前の大惨事となつた。救助活動は西穂山荘、東邦大学医学部、学校の関係者、警察、自衛隊レンジャーなどがおこなつた。

西穂独標への道 ③

「やれやれ、独標さえ越えてしまえば」の引率教師の願いもむなしく、落雷は西穂高岳独標(二、七〇メートル)頂上付近から火を噴き、あたかも濡れ雑巾でシャツとたたいてごく北側斜面を貫通した。

松本深志高校二年生の一一行四十六人のうち、二十三人が斜面を登っており、直撃を受けて、ある者はその場に仰向けに倒れ、ある者は長野県側にまたある者は岐阜県側に飛ばされて、断崖を百㍍二百㍍転げ落ちた。

一人の最後尾にいた五人(うち教師二人)は、まだ北側斜面には至らず、鞍部に向かって対面を下降中だった。

その一人、上条誠二さん(当時松本市中央二年)は、落雷の瞬間、前に出して、右足に打たれたような衝撃が走り、痺れを覚えた。びっくりして視線を上げると、北側斜面を登攀中の一人が長野県(左)側に両手を上げて後ろ向きに落ち、岐阜県(右)側にも岩場を転がるようにならへて落していくのが見えた。

「先生、人が落ちました」と叫んだ気もある。先生の指示でその場に立っていたが、雷と電気が烈しく、体が冷え切って凍死ぬのではないかと思つた。長野県側に十㍍ほど

落ちた田代宗広君が「血が止まらない」と言つたので、そこまで下り、借りた手ぬぐいで縛つたが、うまく縛れなかつた。

現場は修羅場の様相を呈していたにちがいない。「やつてしまつた」と慌ててふためく先生をよそに、生徒たちは半ば茫然とし、打ちひしがれていたようだ。

かなりの時間がたち、西穂山荘からの救援隊が到着した。上条さんは重傷の田近恵寿君がザイル確保で稜線まで引き上げられ、背負子で運ばれるのを手伝い、すでに暗くなつた足元を懐中電灯で照らしながら、山莊に向かつて歩いた。

「独標に上がる途中、何か掛けたある人がいた。そのときまで死者が出ているとは夢にも思わなかつた。ショックが大きかつたせいか、あまり記憶がないんです」と語り、小さく首を振つた。



がると、そこに顔中血だらけの田近君が倒れていて、田近君は頭をもたげ、「誰?」と聞いてきた。二人は救助隊が来るまでそこにじつとしていたが、上では横内教諭が二人の居場所に落ちそながれていた。

「空中を舞つた」上島さんは九死に一生を得、救助隊に導かれ、独標を巻くようにして下りた。現場の惨状を見ていたため、恥ましい体験として残らなかつたせいか、のちに本格的な山登りにめり込んだ。

当事者、同級生たちの思いに温度差はある。

だが、そうであつても西穂独標のある岩稜が、彼ら一人ひとりのその後の人生に重厚な存在感をもたらしたのは間違いない。

文 赤羽康男／写真・山田 毅
(次回も西穂独標への道)

この上条さんに転落を目撃された一人はおそらく、上島正吉さん(当時諏訪郡富士見町)である。上島さんは被雷直後、岐阜県側の急斜面を百㍍落つこちた。気がつくと仰向けで頭は合側にあつた。腰を動かして体を横向きにし、這い上

事故調査報告 松本深志高校は西穂独標遭難事故一年後の昭和四十三(一九六八)年八月一日、追悼文集『独標に祈る』を発行。翌年三月には詳細な遭難記録とともに、登山計画や行動上の問題点を洗い出し、気象専門家らの寄稿も加えた『西穂高岳落雷遭難事故調査報告書』を刊行した。「集団登山として安全を確保するためには、あの天候の中で西穂稜線上を行動してはいけなかつた」と明記、「この悲しい事故の教訓をよく学びとり、生かして行くことが十一名の諸君に報いる道」と刻している。

消えない亡くした悲しみ

西穂高岳独標で亡くなった一人の生徒の遺族を訪ねてみようと思った。だが、すでに三十五年の歳月が流れている。ご両親は健在でおられるのか、健在だとして「何をいまさら」とけげんな顔をされてしまいか。不安を胸に家を探し歩いた。

故・望月文門君の家は、豊科町田沢の国道19号沿いにある旧家だった。八月初旬の暑い日、玄関の障子戸を引き、「お話を聞かせていただけませんか」と来意を告げると、文門君の父幸男さん(へい)、母知恵子さん(ちえこ)は最初戸惑いを隠せなかつたが、「まあ、どうぞ」と招き入れてくれた。

あの日(昭和四十二年八月一日)、幸男さんは勤め先の会社にいた。西山(北アルプス)一帯が黒い雲に覆われているのを見て、山はすごい夕立だらうなと思ったという。帰宅すると、夕方のニュースで松本深志高校生の遭難と文門の訃報を知った近所の方々が詰め掛けていた。

息子が死んだとは全く信じられず、学校から連絡が入って校長室に飛び、その足で夜遅く上高地に上がつた。文門君は独標北側斜面の最上部で打たれた。もし

落雷が五秒遅ければ、文門君は頂上に立ち、そこにいた友達同様かつたはずだ。倒れたのち、人工呼吸を受ける写真が残つており、幸男さんは「即死とされたが、絶対に違う。結局天災ということで片付けられてしまった」「知恵子さんも「当時は何か言う勇気がなかった」と無念さを噛み締める。

二人は一ヶ月後の追悼登山に参加し、息子が打たれた岩稜に立ち、谷に向かつて名を呼び、邊にマジックで名前を記して來た。

「(名前を)探したんですが、見当たりませんでした」と伝えると、「そうですか。もう一回登りたいと願いつつ、かないませんでした」。幸男さんの目が赤かった。

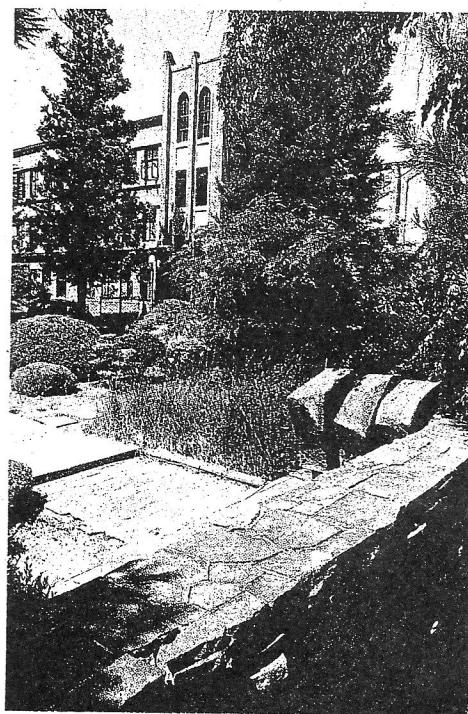
突然長男を失った望月家の三十五年は、苦闘の歳月だったようだ。「夫婦は慰め合えもできるが、兄を亡くした弟はそうはいかなかつた。家もまた崩壊するんです」と幸男さん。知恵子さんは「悲しみを乗り越えるのは大変なこと。他人にはわかつてもらえないです」と話した。

「忘れないでいてくれる方がおられる」と、あの子も浮かばれます」と言葉を掛けていただき、望月家

「橋の設計がしたいと夢を話してくれたことがあります。『お兄ちゃんはいつまでも年取らなくていいね』と会話しています」

「父親の守久さんは一年前に亡くなり、母和子さんとほお会いできなかつた。

文・赤羽康男/写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)



11人の故人名を刻み、前庭東側にある大きな「西穂遭難記念」の碑

を辞した。庭に出ると、サルスベリの花が夏の日盛りの陽を浴びてまぶしかつた。

西穂高町の商店街通りに面した故・嶋田利

夫君の家では妹の恭子さん(ごんこさん)があの日、

西山に不吉な黒い雲があつたと記憶してい

た。「大好きなお兄ちゃん」を失つた悲し

みは深く、「年月が悲しみを癒やしてくれ

るなんとうそですね」と細い声で言つて涙

をぬぐつた。

西穂高町の商店街通りに面した故・嶋田利

夫君の家では妹の恭子さん(ごんこさん)があの日、

西山に不吉な黒い雲があつたと記憶してい

た。「大好きなお兄ちゃん」を失つた悲し

みは深く、「年月が悲しみを癒やしてくれ

るなんとうそですね」と細い声で言つて涙

夢の中でも我が子に会いたい

故・折井博親君の母・富子さん(べ)は、松本市埋橋一の若ち着いた風情の家で静かに暮らしていた。坪庭と池が眺められる座敷で、「あの日は下(街部)もすごい雷雨でした」と、三十五年前の西穂高岳独標の落雷遭難当日を振り返り、話は一ヶ月後に行われた追悼登山に及んだ。

博親君、田村洋一君、片桐進君の三人は長野県側の谷に二百㍍転落、遺体の発見収容が翌日の夜までずれ込んで、深夜ようやく松本深志高校に運ばれた。遺品の確認どうではなかつた。

「いまさらどうなるものでもありませんし、引率の先生との間に何の会話が生まれました。でも、それでも、ああ、先生が来てくれたと思えば、それだけで心が安らぐんですね。悲しみに打ちひしがれたまま、遺族は年とともに消えていきますよ」

鬼氣迫るものがあり、追悼文集『独標に祈る』に載る、当時の千葉さんの長詩「狂った母は、鬼子母神になりました。母は吾が子と同じ年頃の子を食べたりなりました。」などの凄まじい文言が頭をよぎつた。故・片桐進君の母・やすみさんは「とても親孝行な、面白い子でした。夢の中で会

めることもある。

「いいながらも、いつかはお見せいただきたい」とお願いする。「見せていただけますか」とお願いする

と、富子さんは「久しぶりに開けます」と言って、親市さん、博親君の遺影が並ぶ仏壇の引出しから箱を取り出し、紐を解いた。

中で緑色のナップザック、ぽろぼの妻わら帽子、落雷融痕の残る革ベルトと腕時計、

ナップザックを見、独標頂上で足を震わせた。登山に及んだ。

「ああ、お見せください」とお願いする

と、富子さんは「久しぶりに開けます」と言つて、親市さん、博親君の遺影が並ぶ仏壇の引出しから箱を取り出し、紐を解いた。

「見せていただけますか」とお願いする

と、富子さんは「久しぶりに開けます」と言つて、親市さん、博親君の遺影が並ぶ仏壇の引出しから箱を取り出し、紐を解いた。

（）

故・松林直則君の母・千菊さん(せよ)は「あ

の子の代わりに子育てすれば、生きられるん

じゃないか」と思い、事故後十五年ほどして

松本市内に保育園を開園、今まで懸命に生

きてきた。

しかし、無念さはいつまでたっても消え

ず、むしろ年々強まって、夜中にはつと自覚

地図、コンパクトカメラ、財布が入っており、カメラは傷つき壊れ、土がこびりついて転落の激しさを物語っていた。

西穂独標への道⑥

故・堀江成幸君の母・久美乃さん(せよ)は「『独標に祈る』は押し入れの奥に閉まっています。怖くて見られないんですけど、つらい胸のうちを明かされた。

すでに両親とも亡くなり、空き家となつた家が三軒。夏草が生い茂り、玄関先まで入つて行けない家もあった。

遺族たちの心は癒やされておらず、先生たちへの強い思いをたたかれていたことを知つた。時代の流れに取り残されてしまった無人の家を見るにつれ、言い知れぬ大きな衝撃を受けた。

文・赤羽康男／写真・山田毅
(次回は西穂独標への道最終回)

『深志高の強い決意が読み取れる
『独標に祈る』』と事故調査報告書



重い悲しみと祈りはるかな道

松本深志高校一学期終業式後の一年生同
ホームルームで、学年主任の駒村尚子教諭
(五)は、三十五年前の西穂高岳独標落雷遭難
事故について話した。

「私はあのとき、君たちと同じ深志高校の一
年生でした」と切り出し、「何より大切な
のは一人ひとりの命です。やるべきことをし
っかりやって、元気で夏休み後にまた会お
う」と呼びかけた。そして歌を独唱した。
「穂高に逝きし若き御靈に捧ぐ」。落雷遭難
で亡くなつた一年生十一人への鎮魂歌だ。
「天地も碎くるばかり／雷のとどろく穂
高／岩じごしその高嶺より／雷に焼かれ擊た
れて／天翔り給ひし／君らが御靈…」
詩は袖山富吉教諭(当時)が呻吟の末に作
つた。その様子は「きびしい、おそろしいほ
どの表情で、遠くを呼びかけるように目をあ
げ、深くうなずいて書き」続けた。同僚教
諭が記している。

作曲をOBの田嶋大志郎さん(当時は東京
芸大学生)に依頼。田嶋さんは五日間、寝食
を忘れてピアノに向かった。完成後、音楽部
の生徒たちは猛練習し、全校練習を経て、事
故から十日後、県営体育館で営まれた学校葬
で見事に合唱されたのだった。

駒村教諭は当時音楽部だったことから、歌
は譜じていた。昨年四月、母校に赴任し、八

月には追悼登山で初めて独標に登った。「思った以上の廣く、先輩たちも来られていて、とても辛かったです。でも長年の宿題を果たしたような気持ちになりました」

この駒村教諭の歌声を藤本光世校長が片隅で聴いていた。「こういうメロディーだったのか」と感動し、八月一日の追悼式(学校慰靈碑前)に間に合わせるべく、音楽室に通つて音楽教諭にピアノを弾いてもらい、転調の

ある難しい曲を一生懸命マスターした。

追悼式で藤本校長は遺族や参列者を前に歌つた。歌い出すと、覚えている人が何人かいて小さな合唱になつた。

遺族や当事者の癒されない悲しみと苦し
みのなかにあって、遺族の積年の思いを和ら
げたのが、藤本校長の見舞いと読経であった
ことを知った。校長は昨年夏、独標追悼登山
から下山後、当地在住の遺族金眞の家を訪ね
歩いていた。

二学期始業式。校長講話で藤本校長は一人
の遺族からの手紙「神様は永い年月をかけて
平等に苦難を下さり、仏さまは慈悲を下さつ
た。歌い出すと、覚えている人が何人かい
て小さな合唱になつた。

この言葉は人生の戒めとも苦難を乗り越え
る勇気とも受け取れる、と藤本校長は全校生
徒たちに語った。

文・赤羽廣男／写真・山田毅
(次回はカジカの里)

松本深志高校の学校登山 昭和四十二(一九六七)年八月一日、西穂高岳独標での落雷遭難事故以来三十五年、深志高校は山岳部の登山を除いて、学校集団登山を一切行つていな。『遭難事故報告書』では冒頭「われわれは、終生、より安全な学校登
山の姿を、雷災の実相を追い究めて行きたいと、深深く念願している」と記し、そ
の悔恨と決意のほどをうかがわせる。

遙かなる西穂高岳

新村小百合にとって西穂高岳独標は遙かに遠い場所であった。それは距離のみならず、心情面においても。ところが、平成九年初夏、専門学校の学生たちを連れて上高地に行き、小梨平から西穂高岳の鋭利な山稜を眺めているうちに、「あそこに登らなければいけない」という思いが、入道雲のごとくわき上がってきた。本当に突然だった。どこの山にも登ったことのない自分が、なぜそうした衝動に突き動かされたのか、いまでもうまく説明できない。

上高地を下りると即ち、松本深志高校に電話を入れた。独標に登る計画があるのか、全ての初心者をしており、加わっていとの返答だった。昭和四十二(一九六七年八月一日、深志高校二年生の一行四十六人(うち教師五人)が、西

穂高岳登頂の帰り、独標と呼ばれる岩稜で落雷に遭い、十一人の生徒が死亡する未曾有の大惨事が起きた。慰靈登山は命日に学校関係者が人知れずおこなっていた。

小百合の初めての独標は霧に包まれて沈黙なものとなつた。一歩また一步近づくにつれ、先生たちは押し黙り、荒い呼吸音だけが聞こえた。鳥肌立つ全身の恐怖を感じながら這い上がり、「ああ、ここで」と思った瞬間、泣けてしまつた。

三十五年前のあの日、小百合はアニス部の夏合宿で学校に泊まり込んでいた。「山の事故で誰か亡くなつたそう

よ。びっくりして校長室に走り、テレビのニュースを固唾を飲んで待ち、報じられる度、「死」が一人、五人、七人と増えていくのにショックを受けた。夏合宿と日程が重なるなければ、自分もおそらく独標に登つていた。

深夜帰宅すると、西の空で雷鳴があつた。事故以来、雷が怖くて仕方なかつたが、その夜の雷は不思議と懐かしかつた。「帰つて来てくれたんだ…」

小百合は母が戦後間もなく創設したタイピスト学校を丸の内ビジネス専門学校に発展させ、校長の重責を担いつつ、昼夜授業を受け持つ。学生たちは「いま

講堂にしただけで、慰靈行事の形は取らなかつた。小百合はあいさつを「私たちにはこれからできること、せねばならないことがまだたくさんあります。いい年を重ね、明日を見つめて生きゆきましょう」と前向きに締めくくつた。

小百合は涙をこぼして少しほほ笑んだ。文中・敬称略、日曜日掲載(赤羽 康男)

の時間の大切にしないといふ。親友をがんと脳腫瘍で相次いで失い、重い意味を込めて言うのが、若者に伝えるのは難しい。遭難事故当时を振り返れば、自明の理である。

被雷の悲しみ 35年後の今も

あれに登らなければ突然の衝動

この年になつてやつと、遺族の無念さ、辛さ、引率した先生の後悔や苦楚がわかるよう気がします。それを全部含めた悲しみを私たち同

期はみんな持つてゐると思うんです」小百合は涙をこぼして少しほほ笑んだ。

てやつと、遺族の無念さ、辛さ、引率した先生の後悔や苦楚がわかるよう気がします。それを全部含めた悲しみを私たち同